

情報化時代の大学図書館

小野啓郎 大阪大学名誉教授

江戸時代後期、日本を訪れた外人が驚いたのは庶民の識字率の高さであった。子供や農夫に至るまで文字が読めるというのは、当時の西欧先進国でも“信じられない”ことであった、という。その秘密が寺子屋の普及にあったことが今ではよく知られている。お師匠さんにならって、素読するのが教育の基本であった。

文字を大切にする国民性もまた大いに与っていたと思われる。漢字交じりの平仮名文が、この国の急速な近代化に貢献したことは間違いない。書かれたものを大事にするこの国では、公家社会も、近代以前の藩校も民間の塾もそれぞれが図書館を持っていた（図書寮、芸亭 - うんてい、金沢文庫、足利学校など）。

幕末～文明開化期、まずオランダ語、次いで英語の書籍がこの国に持ち込まれた。リーダーの一人福沢諭吉は二度の欧米回覧で、国費を投じて、おびただしい英語辞書・学術書を購入させたい。同じ書籍を複数購入したのは慶応義塾の塾生に読ませるためであった（帰国後、物議を醸している）。辞書を含め、一冊ずつしかない蘭書を奪い合って会読した適塾の辛い経験が、福沢の骨身に沁みていたに相違ない。

明治・大正期、貧しい新興国日本が、開拓地と植民地（朝鮮と台湾）には大学と図書館の整備を優先させた。太平洋戦争期の占領地にはそうする余裕もなかっただろう。

敗戦後、アメリカ民主主義が日本を変えた。文教政策が学校教育システムを一変し、それを支援する形で大学図書館の充実が図られた。China Medical Board からの資金援助、図書館システムの近代化、英文書籍の寄贈がこの国の古い医学と医療を変えていった。ただし情報化が進む以前には、医学中央雑誌や Index Medicus など、検索誌頼りの文献情報集めに、若い学徒は汗をかいたものである。

20 世紀の末、パソコンの普及でインターネットアクセスが自由になると、無料検索サイト PubMed が情報収集の広がりや研究のスピードを一変させた（これはアメリカ国立医学図書館の国立生物工学情報センターが無料提供する文献検索サービスであることが、どれほど知られているだろうか？）。

そして 21 世紀である。大学も大学図書館も変身し続けている。図書館が、もはや教育や研究の現場と切り離せないことはいままでもない。図書館が時空を超えて情報の結節点となった今日、職員の任務と貢献度は昔日の比ではないとつくづく思う。

大阪大学の生命科学図書館を訪れる度に思うことがある：
一つは儒教文化圏からイスラム文化圏へも対象を広げる必要がありはしまいか？
今一つ。急速に進歩する（拡張・変容・洗練）情報リテラシーの学習にマッチしているのかしら？という疑問である。

ただし、書かれたものや、ネット情報に信を措き過ぎるという民族性が裏目に出ることもある。iPS細胞の臨床応用を騙ったM氏事件である。東京の二大国立大学を舞台に仕組まれた実体のない成果情報が、十分な検証なしに、webに登場し、研究助成金を獲得していたという。自立した研究者の能力もモラルも、じかに、世界と向き合う時代になったとも云えようか。